

最新事情

体験することを重視した3年間。
「チーム春野」が生徒を支え、成長させる

高知県立春野高等学校

(高知県高知市)

明治41年に弘岡実業女学校として開校以来、農業高校、園芸高校として地域の農業の担い手を育成してきた。平成18年に総合学科に改編。校是「なすこと」によって学ぶの下、さまざまな体験学習を実施している。地域との連携や実習に取り組み、資格や検定に挑戦する生徒と、その挑戦を教職員が「チーム春野」となり支える様子を取材した。

実践的な学習に欠かせない キャリア教育と地域連携

高知市の西側に位置する春野町。清流として名高い仁淀川が流れるこの地に高知県立春野高等学校はある。

明治41年に弘岡実業女学校として開校。以来、地域で活躍する農業の担い手を育てるため、農業教育の一翼を担ってきた。その後、高知県立弘岡農業高等学校、高知園芸高等学校と名を変え、現在に至る。

平成18年に総合学科に改編し、学びのスタイルを大きく変えた。1年次は共通の教育課程で学び、2年次からは園芸、食農、生活クリエイト、人文の4系列に分かれる。

下司眞由美校長は目指す教育をこう話す。「私たちは、校是である「なすこと」によって学



春野高等学校のシンボルになっている花時計



「私たち教職員の指導についてきてくれる素直な生徒がたくさんいるのが、本校の自慢。シンボルの花時計とともに明るく元気に育ってほしい」(下司眞由美校長)

ぶ「Learning by Doing」のもと、各系列において体験学習を重視しています。豊かな創造性と自ら課題を解決できる力を養い、地域に貢献できる人材を育成する。その目標を実現するために、教職員が一丸となり教育活動を行っています。いわば、「チーム春野」と称する体制で指導しています。

同校では、総合学科の特性を生かした実践的な学習を展開しており、ほとんどの取り組みがキャリア教育と地域連携につながっている。社会人として必要な基礎力を身に付けるために設けられている科目が各学年にある。

1年次「産業社会と人間」では、コミュニケーション力や職業観の養成を目的としている。県内の大学や専門学校などに出向き学習したり、主に専門職に従事する方にインタビューを行ったり、春野町の産業や歴史、観光などのテーマに沿って調査研究を行ったりする。まとめとして、校内外に向けて研究発表をするため、春野地域をアピールする場にもなっている。

「産業社会と人間」での学びを深めるのが、2～3年次「総合的な学習の時間（なすこと）」によって学ぶプロジェクトである。

2年次は全員が夏休みの3日間、高知市内でインターンシップに参加する。事前学習やマナー研修を受けた上で、希望する進路や興味がある事業所で就業体験をする。昨年度の協力企業は88社に上った。

3年生の「課題研究」では、各系列の特性を生

学校設定科目「子育て支援講座」で32名が体験学習に参加。赤ちゃんを抱っこしたり、お母さんが作った離乳食をあげたりしている



(前列左から) 結城美帆さん、山崎菜緒さん
(後列左から) 辻村優衣さん、恒石直子先生、西森妙さん



かした学習を展開している。

例えば、園芸系列の「がっかり街道 再生プロジェクト」あじさいでつなぐ地域の輪」。以前はあじさいが咲き誇っていた用水路にあじさいを復活させるため、校内のプラントナーで育てたものを数十メートルに渡り設置した。

「正門の前を通る県道はあじさい街道という名が付いています。春野の老人クラブの方が毎年、見事なあじさいを咲かせてくださっていたのですが、お世話をする後継者がいなくなり道路が寂しくなっていました。再生プロジェクトは、園芸のスキルを生かすことができる取り組みで

す。新聞にも取り上げられました」(下司校長)。

昨年度は、生活クリエイト系列が生み出したキャラクター「はるのん」も話題を呼んだ。同校のシンボルである花時計をモチーフにしており、クリアファイルやのぼり、法被になっっている。早速、校内販売や農業フェアなどのイベントで活躍しているというから頼もしい。

「座学で学んだことがどれだけ役に立つのか。学び足りなかったことは何か。体験することで、学びの成果を実感するはずです。プロジェクトでのあらゆる経験が、生徒の成長につながります」と下司校長は表情を引き締める。

春高でしかできない経験が 生徒を成長させる

子育て中のお母さんと接する機会もある。生活クリエイト系列の科目「子育て支援講座」は平成19年度より開講されている人気の授業だ。お母さんと乳幼児を学校に招き、子育てについてこう話す。

「親子に年6回くらい定期的に来ていただき、お母さんと赤ちゃんの生活の様子をインタビューしたり、赤ちゃんの発達などを観察させていただきます。お母さんや赤ちゃんとの触れ合いを通じて、自分たちの今後の生活に役立てるといのが授業の大きな狙いです。こうした授業を実施している高等学校は全国でもそう多くないと思います」。

お母さん手作りの離乳食を赤ちゃんに食べさせたり、抱っこさせてもらったりするそうだ。再会のたびに成長している赤ちゃんや、お母さんの変化に間近に触れることができるのは、極めて貴重な経験だ。自由選択科目にもなっているため、他系列の生徒も選択することが可能だ。「系列をまたいで興味がある科目を学べるのは総合学科の特長です」と恒石先生は話す。

生活クリエイト系列の学校設定科目「生活教養」も同じく、他系列の生徒が履修できる。この授業では毎年、秘書検定に挑戦している。下司校長は、秘書検定を次のように評価する。

「本校では資格や検定への挑戦を推奨しています。秘書検定もその一つです。言葉遣いや電話応対など意図して学習しなければ身に付かない基本的なマナーを学ぶことができます。社会に出たときに通用するビジネスマナーを習得して卒業してほしい。そう思い、継続して受験しています」。

同校は平成30年度、初めて団体優秀賞を受賞した。連絡を受け取ったときの様子を恒石先生は「声を上げて驚きました。うれしかったですね。すぐに下司校長に報告したことを覚えていきます。生徒にとっては勉強がつかいときもあつたはずですが、よく耐えました。生徒の頑張りを誇りに思います」と振り返る。

「つらい」という言葉の意味には、受験時期が大きに関係していた。昨年度は6月に約9割が、残り1割の生徒が11月に3級に挑戦した。

「6月の受験だと時間があまり確保できず、詰め込んで学習しなければなりません、合格すれば調査書に書けるとプラスに考え、6月受験を希望した生徒が多かったです」(恒石先生)。

教員のサポートが合格への一番の特効薬

恒石先生は秘書検定の指導が初めてだったが、検定の指導に慣れているベテランの講師の先生と共に、二人三脚で指導を行ってきた。

「授業では、言葉遣い、お茶出し、電話応対、冠婚葬祭などマナーの基本を網羅しているテキストを使っていきます。それに加えて過去問題を書いたオリジナルプリントを配布し、繰り返し問題を解かせ、小テストを数回実施しました」。

中間試験までに模擬テストを3回実施し、中間試験の内容にも秘書検定の問題を入れた。試験前の1週間は、毎日確認プリントを解かせ、不正解者が多かった問題は詳しく解説した。

「合格するには、何よりも本人のやる気が大切。これだけ詰め込むと、生徒の気持ちが悪くやすくやすがちなので、そうならないように、『分からない部分はない?』『勉強しないと合格できないよ』と声を掛けてきました」(恒石先生)。

生徒はどのように感じたのだろうか。今年3月に卒業したばかりの4名に話を聞いた。

生活クリエイイト系列の結城美帆さんと山崎菜緒さん、辻村優衣さん、人文系列の西森妙さんは、在学中に秘書検定3級に合格した。辻村さ

んは2級にも合格している。

「当校で、初めて秘書検定2級に合格した生徒です。11月の受験だったので補習でフォローしました」と恒石先生は顔をほころばせる。

秘書検定について「難しかった」と口をそろえる4人だが、多くの収穫があったようだ。

「あいさつや話し方、正しい部屋の入り方などを知ることができました。進学の面接練習で礼儀正しいと褒められたのがうれしかったです。卒業後はブライダル系の専門学校に行くので生かしていきたいと思います」(結城さん)。

「自宅では、声に出しながらノートに書くことを繰り返し勉強しました。販売実習『ショップ花時計』で接客が好きになり、卒業後は接客業に就きます。秘書検定で学んだことをフルに活用していきたいです」(山崎さん)。

「秘書検定2級の合格者がまだいないと聞き、1番初めに受かりたいと思い挑戦しました。初の合格者になれてうれしかったです。席次や事務用品などの一般知識を覚えるのは大変でしたが、どこでも生かせる内容が学べました」(辻村さん)。

「食事のマナーやお茶の出し方、敬語の使い方などを学べてよかったです。2学期以降は、実物を使いお茶出しや入室を練習できたので、秘書検定の学びを体得することができたと思います。系列は違いましたが、この授業を選択してよかったです」(西森さん)。

皆、部活動やプロジェクトへの参加、進学・就職など忙しい日々の中での挑戦だった。そう

した状況でもやり抜くことができたのは、教員の指導力に他ならない。

今年3月、下司校長と恒石先生は、大きく成長した生徒を送り出した。卒業式で答辞を読み上げた辻村さんは、後輩にアドバイスを送る。

「春高での3年間で、自分を成長させてくれたと思っています。さまざまな挑戦を通じて、頑張ることや仲間と協力することの大切さを学ぶことができました。勉強や部活動が上手いかわず泣いたこともあったけど、やりきれたのは周りの支えがあったから。他校ではできない経験ができたと感じています。後輩にも秘書検定をはじめ、多くのことに挑戦してほしいです」。

彼女たちにとって3年間の学びが、どれだけ充実していたか。輝く笑顔が証明していた。



(上) 販売実習「ショップ花時計」。系列を越えて体験することができる。校内で育てた植物や食農系列で作ったものを販売している
(左下)「はるのん」ののぼりが大活躍。結城さんと山崎さんは制作に携わった

